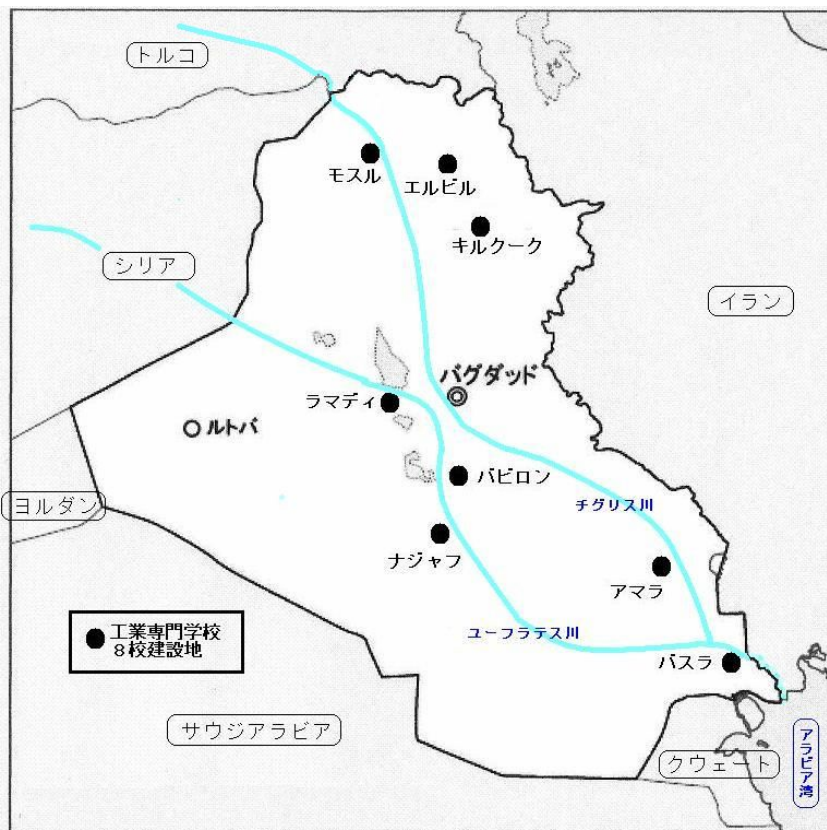


イラクの工業専門学校

2007年12月

イラクは現在、米軍を中心とした多国籍軍がサダム・フセイン政権を倒した後、民主化プロセスが十分に機能せず、連日のようにテロや武力衝突が起こり、泥沼の様相を呈している。これについては、部族・宗教・経済・歴史など複雑な要素が絡み合っていて簡単ではないが、今後機会をとらえて考えていきたい。もう30年近く前になるが、わたしは1979年からイラクのプロジェクトを担当し、その後工事代金繰り延べ交渉なども含め約15年間イラクと関わりをもってきた。1979年は奇しくもサダム・フセインが大統領に就任し、名実ともにイラクの最高権力者になった年である。1981年から1985年の4年間は、イラク工業専門学校8校建設工事のプロジェクト・マネージャーとして、バグダードを拠点にイラク中を駆け回っていた。ちなみに、この期間は1980年9月に突如始まったイラク・イラン戦争の真っただ中であり、空襲やミサイルの飛来、激戦

8 IOT 建設地



中の南部戦線のすぐ近くを通った話などなど興味深い話はいろいろあるが、それも別の機会に譲りたい。

この工業専門学校 8 校建設プロジェクトは、今では正確な資料が手元に残っていないのが残念だが、1970 年代末から 1980 年代にかけて、イラクの建設省と当時の換算レートで総額約 600 億円のフル・ターン・キー契約のプライム・コントラクターとして、大成建設、フジタ工業、住友建設（当時）などの建築部分のサブ・コントラクターと、教育用資材・設備、カリキュラムなどを内外の専門家・サプライヤーを組織して、イラクの主要都市 8 カ所に建設したものである。

8 カ所は地図にあるように、北部のアルビル（当時はエルビル）、キルクークなどの現在ではクルド自治区になっている地区と、古代シルクロードの城郭都市に近いモスル、中部地区では米軍との衝突で有名になったラマディヤ、あの空中庭園で有名なバビロン（現在の町の名はヒッラ）、イラン革命の最高指導者ホメイニ師が長く亡命していたナジャフ、当時はアダムとイブのリンゴの木（といわれるもの）が保管されていたアマラ、シャトゥルアラブ川に面してシンドバッドもここから航海に出て行ったとされている港湾都市バスラである。

工業専門学校（Institute of Technology = IOT）は、高校を卒業した学生が 2 年間、工業の技術や理論を学ぶ所で、機械工学科、電気工学科、建築学科、冶金学科などがあり、それぞれのワークショップでは最新の設備で勉強ができるように設計されていた。たとえば、機械工学科ワークショップでは、数十台の旋盤やボール盤、大型プレス機械などを備えて実習をしていた。これらの IOT は 1 学年 200－300 人の学生を全国から集め、学生寮も完備している立派なものであった。1980 年前後のイラクは原油産出量も順調に増加し、国力が急拡大していた時期で、IOT の教官や学生も意欲に燃えて学習していたように思う。

バビロン IOT モデル



左端の H 型に見えるのがワークショップの建物。その右側 1 階建てが管理棟、十字型の 2 階建て建物は教室棟。中央のコの字型建物は、男子学生寮。右側に見えるのは、教職員住宅と女子寮。

ただ、その後長期化したイラク・イラン戦争はイラクの国家財政を破綻に追い込み、多くの優秀な教師や学生も徴兵されていった。さいわい休暇中で死傷者はいなかったと聞いているが、完成したばかりのアマラ IOT の学生寮がイランの爆撃機のみ사일 공격を受け、半壊したこともあった。

現在これらの IOT がどうなっているか知る由もないが、エルビル IOT はサラハディーン大学の工学部として、名門校になっているという話もある。いずれにしても、IOT の卒業生は何万人もいるはずである。もちろんその一部は戦争や災害などで帰らぬ人となっているだろうし、海外に移住してしまった人もいるだろう。しかし、イラクの将来を考えると経済の安定が重要であり、そのためにも IOT の卒業生の技能は高い価値があるはずである。遠くない将来、イラクの治安状況が好転して、日本や東アジアの企業のヒト・モノ・カネ・情報をもって、イラクで製造業を IOT の卒業生たちといっしょに設立・運営することが、わたしの夢というか、やり残していると感じていることのひとつである。

